東方電光伝

明久

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方電光伝

【Ｎコード】
Ｎ７３５１Ｙ

【作者名】
明久

【あらすじ】
平和主義者の最強系主人公が東方世界を駆け回るお話し。オリ主です。駄文です。それでも良い方は、どうぞ。　注：作者の辞書には、規則性という文字がないので更新日は一定ではありません。ご了承ください。

第一話　神社の中の妖怪（前書き）

駄文ですが、よろしくお願いします。

第一話　神社の中の妖怪

まず、俺は一人でなんかよくわからない山を歩いていたんだ。

そう。歩いていたんだ。リュックを背負って。

なぜかって？学校ではいじめられ、家では家庭内暴力の標的にされたからだ。

だから俺は家出した。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

家出をしてから数日、山の中をほっつき歩いていると、目の隅に神社があった。

何でこんな所にあるんだろう。と思いながら、実際にはうれしかったよ。うん。寝るところが出来たんだ。いつもは地面に座って寝てたんだよ。超寒いからね。

その神社までいくと、意外と大きかった。と思う。えーっと名前はっと。

「〇〇神社」

えー、読めませんでした。ホント。ホントだってば。消えてて読めなかったんだって。

まあ、いいや。えーと鐘を鳴らして

「失礼します。」

神社の中に入りました。何？そんなんでいいのかって？だって賽銭箱ないんだもん！他に何すればいいのさ？

そこはいいとして。この目の前の状況をどうするかを、まず教えて欲しい。

だって……　だって……

黄色の毛並みを持つ狼がそこにいたのだから。

ちょっとまて。なぜこうなっているんだ？どうしてこうなった？

落ち着け俺。深呼吸するんだ。

フゥー。よし。状況を整理しよ「おい」って

「しゃべったー！！狼がーー」

「しゃべっちゃ悪いか。まあ、いい。お前に質問がある。」

狼がしゃべったうえに、なんか質問された……。

「な、なんでしょうか……」

「なぜ、お前はここにきた。」

「えーっと。いじめられて、家庭内暴力の被害にあって、もうどうでも良くなったから家　出して、この山歩いてたらこの神社を見つけたから入ったらこうなった。」

「……」

まさか……。

「あの、答えになってなかった？」

「なぜ、驚かない？俺は妖怪だぞ。」

えっ。なんか無視されたし、神社に居たから神だと思ってた。

「んーー。もうどうでも良くなったからかな。死ぬなら死ぬでいいし。」

「……フッ。気に入った。なあ。もうひとついいか？」

「なんだ？」

「人生をやり直す気はあるか？」

なんだってこんな質問するんだ？けど、答えるとしたら、そんなことは

「ない。」

「即答かよ。なぜだ？」

なぜかって？

「こんな時代をやり直す必要はないからだ。」

「あーー。そこは大丈夫だ。」

「？　どうゆうこと？」

「行ってもらうのは、過去だ。」

「過去？どのくらい前にいくんだ？」

「えーー。弥生ぐらいかな。」

まじかよ！！

「んーー。だったらいいかな。でもなんだってそんな昔にいくんだ？」

妖怪は、少しためらったが、はっきりと言った。

「……俺は、妖怪の最後の生き残りだ。みんな人間に退治されちまった。俺の数少ない友達もな。だから俺は過去を変えたい。だからだ。」

へーー。妖怪にもこんな気持ちがあるのねーー。感心した。

「分かった。だったら早くしようぜ。俺もこんな時代から、早く消えたいぜ。」

「よし。じゃあ目を閉じてくれ。」

俺は素直に目を閉じて少しまった。すると何かが当たり、体の中に何かが入ってくるのを感じながら、意識を失った。

第一話　神社の中の妖怪（後書き）

東方キャラは次話に出せると思います。

たぶん。

第二話　能力と修行

俺は目を開ける。すると・・・

「ここどこ？？？」

青い空が見えた。

「そういえば・・・」

たしか俺は、神社を見つけて、妖怪に会って、転生だか過去に行くって言われてきたんだっけ？

まあ、そこらへんはいいや。とりあえず起きよう。

「ふぁ～～、ん～～～」

あくびをした後、思いっきり伸びる。

目に映ったのは、大地と森と・・・

「妖怪？」

なぜ？どうして？という思いを抑えつつ、考える。えーと憶えている事はなんだろう？

そして、頭に浮かんできた言葉は

『光を操る程度の能力』

と、

『電気を操る程度の能力』

であった。強すぎない？とも思いつつ、ほかも考える。そういえば

名前憶えてたっけ？

・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・・・・

・・・

憶えてない！！！ラッキー！好都合じゃん。あんな奴等からもらった名前なんて忘れたいと思っていたところだ。ってことだから名前を考えよう！！！

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

思案すること１０時間、やっと決まりました！！

名前は、安藤光輝（あんどうこうき）ってことになりました。

よろしくっ。

そういえば、外見って変わってんのかなぁ？

ってことで川にいこう！！

外見変ってなかった。

でも・・・

尾と耳がついてました。狼の。

しかも黄色。神社で会ったあの狼といっしょじゃん！

俺も妖怪かぁ～～。いっぺん妖力だしてみっか。

「ん？」

なんか違うのもあるぞ。なんだろう。妖力とあわせて３つあるぞ。

ボファァァァァァァァァァァァァァ

右手に妖力、左手に・・・

「霊力？？？」

ってことは、俺は半人半妖になるな。

で、もう1つの力は・・・

ボフッ

右手の人差し指の先にポツンと

「魔力？？？」

なんで流れてんだ？？？でも小さいな・・・。

よし！！！修行しよう。

第二話　能力と修行（後書き）

すみません。東方キャラ出せませんでした。ごめんなさい。

第三話　ある日の出来事

修行し始め早１０００年（ぐらい？）経ちました。

いやー、１０００年って以外と早いもんですね。

まー、けどいろいろあったんですよ。尻尾増えたりとか。

ちにみに、今、四尾です。

あとは、霊力と妖力と魔力がけっこう増えたり。

能力を制御出来る様になったり。

光のほうは、光の速さで移動できるようになったり、光を集めて攻撃できるようになったりとか。

電気のほうは、出力を変えたり、形を自在に変えたりできるようになったぐらいかな？

でもね～、寂しいんだよね。孤独なんだよ孤独。話し相手が居ないんだよ。

そんなことを思いながら、森を歩いていた、ある日。

「私の名前は八意　永琳よ」

・・・・・・なんでこうなったんだっけ？？？

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

たしか、暇だから森を散歩してたんだっけな。

まあ、襲ってくる妖怪は撃退しつつ。

撃退しつつ、この一言。

「ああ、今日もいい天気だ「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」ん？なんだなんだ？？？」

一言言い終わる前に悲鳴が上がったぞ。

そもそも、この時代に人が居るのか？
まあいい。行ってみようじゃないか。

～妖怪を撃退している妖怪移動中～

と、そこで見たのは、一人の少女と妖怪数十匹。
少女の方は、必死に弓を射ている。
さて、助太刀するかな。
今に襲い掛かろうとしている妖怪を、光の速さで蹴っ飛ばしながら
「助っ人とーじょー！大丈夫かい？お嬢さん？」
ちなみに、今は霊力を出している。
少女・・・もとい永琳は
「早くこいつらやっつけて」
と、言ったので

「了解」

と言い、電気の槍を妖怪の数分作り、

「１０万Ｖ（ボルト）　雷槍（らいそう）」

その槍を、真上から落とし、瞬殺する。

「終わりましって、どうした？？？」

永琳が口をあんぐり開けて驚いていた。

「あなた、相当強いのね。名前は？」

「ん？あぁ、えーと安藤光輝、ただの半人半妖だ」

「半人半妖？へ～え、だから会ったことが無いのね。そういえば尻尾もあるわね・・・」

なんか一人で納得していた。

「あ、私の名前は八意　永琳よ」

回想終了。

「と、言うわけでこうなっている」

「光輝、あんた何言ってるの？」

「ん、あぁ気にするな」

永琳になんかツッコまれてしまった。

「とゆうわけで、じゃ、またな永琳」

「待ちなさい」

襟首をつかまれて、引っ張られる。

「なんだよ」

「光輝、あたしの・・・」

まさか・・・

「家に来なさい」

「なんで？」

「だって家ないんでしょう？」

「言ってないが・・・そうだ」

今の今まで絶賛野宿開催中だ。

「でしょう？なら決定」

「いいのか？」

「いいわよ。さ、行くわよ。付いてきて」

「なあ、永琳」

さくさく行く永琳をちょっと止め

「なに？」

そう言いながらこっちを向く永琳の頭に手をのせて

「ありがとう」

と微笑んだ。

第四話　古代の未来都市（前書き）

えーりんキターーーーーーーーー

第四話　古代の未来都市

ーSｉｄｅ　永琳ー

私は妖怪に襲われていた。

私のレベルは、弱い妖怪なら倒せるレベルだ。

なんでそんな私がこんな所にいるかというと、弱い妖怪しか出てこないから。

もう何回も来ているし、今回も大丈夫だと思っていた。

が、今回は集団で襲ってきたうえ、一匹一匹が私が倒せるレベルを超えていた。

もう四方は囲まれていて、逃げる場所などなかった。

必死に応戦するも、悪あがきにもならず。

”もう無理だ”と思った瞬間、

「助っ人とーじょー！大丈夫かい？お嬢さん？」

と、緊張感がない助っ人がきた。

その助っ人には、尻尾がついていた。

・・・・・・・・・・尻尾？？？

だけど、霊力が出ているんだけど・・・

まあ、気にしないでおこう。

とりあえず、

「早くこいつらやっつけて」

と言っておいた。

こいつらが闘っている間に逃げればいいと思っていた。

が勝負は一瞬でついた。

助っ人が、

「１０万Ｖ　雷槍」

と言ったら、妖怪が一匹残らず黄色い槍に刺さって死んでいた。

「終わりましって、どうした？？？」

私はとても驚いた。

都市（？）にもこんなにあっさり妖怪を倒せるやつは、そうそうい

ない。

思わず、

「あなた、相当強いのね。名前は？」

と聞いてしまった。

助っ人は

「ん？あぁ、えーと安藤光輝、ただの半人半妖だ」

と名乗った。

「半人半妖？へ～え、だから会ったことが無いのね。そういえば尻尾もあるわね・・・」

耳もあった。

瞳は黒く、髪は銀色、尻尾と耳は黄色く、身長は１７０ぐらい。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・けっこうカッコイイし

はっ、いけない。私、名前言ってないじゃない。

「あ、私の名前は八意　永琳よ」

危ない危ない。言い忘れるところだった。

と思っていたら、

「と、言うわけでこうなっている」

「光輝、あんた何言ってるの？」

明後日の方向をむいて言っていた。

「とゆうわけで、じゃ、またな永琳」

「待ちなさい」

反射的に襟首を持って引っ張ってしまった。

「なんだよ」

しまった。反射的にやってしまったから、言うことが何も・・・

「光輝、あたしの・・・」

ええぇ。こうなったらアドリブでなんとか・・・

「家に来なさい」

何言ってんの私！！！

「なんで？」

「だって家ないんでしょう？」

あるって言われれば終わりじゃん！
「言ってないが・・・そうだ」
あ、危なかった。
「でしょう？なら決定」
「いいのか？」
「いいわよ。さ、行くわよ。付いてきて」
口調とは裏腹に内心は嬉しかった。
「なあ、永琳」
「なに？」
光輝が呼んだので振り返ると、手を置かれ
「ありがとう」
と微笑まれた。
思わず見とれてしまった。
どんな女でもたぶんおとせるだろう。
ずっと見ていたら、光輝に

「？どうした？？」

と言われてしまった。

自分の顔が赤くなっていくのが、嫌でも分かった。ので

「な、なんでもない」

と誤魔化しておく。

～妖怪・少女移動中～

ｌＳｉｄｅ　光輝ｌ

今、永琳のいる町（？）の目の前にいるんだが・・・

「・・・うそ・・・だろ・・・」

そこには俺が前世にいた頃の東京に似ていた。

場所は変って永琳の家。

家には薬が大量に置かれていた。

「おい、永琳。この薬の量はなんだ？」

「え？あぁ薬？作ってたら増えってってこうなった」

「増えってってこうなったって・・・」

正直あきれた。いや、あきれないほうがおかしい。

「能力でつくってたら・・・ね」

「能力って・・・永琳の能力ってなんだ？」

「私？私の能力は『あらゆる薬を作る程度の能力』よ」

「あらゆる薬を、ねえ・・・」

「じゃあ、光輝の能力は何？私言ったんだから光輝も言いなさいよ」

「俺は『光を操る程度の能力』と『電気を操る程度の能力』だ」

「！二つも持ってるの！！」

「ああ。なぜかな。」

やっぱ二つは珍しいのか・・・。

なんて思っていると永琳が

「そういえば私、ここで天才として扱われているから」

・・・これから先、どうなっていくのやら・・・

第四話　古代の未来都市（後書き）

永琳編は2・3話ぐらいかきたいと思っています。

第五話　とある永琳との１日

永琳と出会い、２００年位たちました。

いやぁ、いろいろあったんですよ～。ホントに。

出歩いてたら、

「妖怪だぁぁぁぁぁぁぁぁ」

ってさけばれて大騒ぎになったりとか、

永琳がやっとの思いで説得して、俺が出歩けるようになったら、

「こっちで○○してください」

「いや、こっち××してくださいよ」

などなど、引っ張りだこになったりとか。

まあ、なんかいろいろ思い出していたら、永琳が

「光輝～～～。早く、行くわよ～～～」

おっと、そうだった。たしか今日はどっかに行くんだっけ？

「と、言うわけでやってきました商店街（？）。よっっ」

パチパチパチ（光輝が拍手する音）

「なーに一人でテンション上がってんのよ。早く行くわよ」

「？行くってどこへ」

あれ？なんか俺どっか行きたいって言ったっけ？

「時計屋よ。光輝腕時計欲しいって言ってたじゃない」

あぁ～～～。たしかそんなこと言ったような、言ってないような。

「あと他にも欲しいものがあったら言って。買ってあげるから」

なんか妙に今日は優しいな。いつもは、あれやれーー、これやれーーってうるさいのに。

「なあ、永琳。今日はなんかめでたい日か？」

「そうよ。今日は・・・・・・」

なんだろう。

「光輝と出会ってから２３７年目よ」

「中途半端だなおい」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「さて光輝、どんな腕時計が欲しい？」

よし、遠慮なく言わしてもらおう。

「よほどの事が無い限り壊れないのと、俺の扱う電気で動く事と、何億？出しても壊れないやつ」

「ある？」（永琳が言った言葉）

「ありません」（店主）

「作れる？」（永琳）

「3年あれば」（店主）

いや、無理だろ。んなもん作れんのか？

「そう。ぜひとも作って。報酬ははずむわ。さて光輝、他に欲しいものある？」

「・・・・・・」

「光輝？？？」

「えっ。いや、なんでもない」

「？？？」

ここの技術ってどうなってんだ？

「んーーっと、そうだな。・・・・・・銃とか」

「銃？」

「そう、銃。妖力とか出せたり、電気流しても大丈夫なやつ」

「そんなもん、光輝なら普通に出来るでしょ？」

「いやーー、それがな、小さい妖力弾出そうとしたら、直径１Ｍの妖力弾が出来てしまってな、それ以上小さくなんないんだよ。ここの技術なら出来なくもないだろ？」

「・・・・・分かったわ。それも含めていろいろやっとくから光輝は家に帰っていいわよ」

「？なんで？」

「もう私の懐が無いからよ！！！」

「悪い悪い、分かった、分かったから」

俺の胸の中でポカポカ殴ってくる永琳を受け止めながら、

「じゃ、また後で、家でな」

と言いながら、店の扉を開けた。

「おっし。久しぶりに料理でも作るか！」

日々のお返しに永琳にご馳走を作ってやるか。

～その日の夕食事中の会話～

「ねえ光輝、これ何？」

「ん？チャーハン。なんか悪かったか？」

「いや、悪かないけど光輝が料理で私に勝てるわけなんん！？！？！？」

無理やりチャーハンを押し込む光輝。

「いいから喰ってみろって」

「（モグモグ、ゴックン）！！！美味しいわね！！！」

「だろ」

「そうね。これから毎日3食作ってもらおうかしら」

「だぁぁぁぁ。余計な事しなきゃ良かったーーー」

完璧な余談である。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

～3年後～

よほどの事が無い限り壊れないのと俺の扱う電気で動く事と何億？出しても壊れない腕時計と、妖力とか出せたり電気流しても大丈夫な銃が今、この俺の手の中にあります。

銃を入れるホルスターもあります。やっときたーーーー！！！

試しに今操れるＭＡＸの２億？を流してみても正常に動いています！！！

超感動してます！！！

だけど１？位ずっと出しっぱにしとかなきゃいけないんだけど、こ

んくらいわけなわ。（逆に難しいかも）

「ありがとう、永琳」

今は何かを作っている永琳に言ったが聞こえてないだろう。

平和だった。

迫りくる永琳との別れを知らずに・・・・・・。

第五話　とある永琳との１日（後書き）

長かったかもしれません。

第六話　月移住計画発動

どうも、こんちわ。

最近、五尾になった安藤光輝です！

あと、永琳に出会った頃には黒目だって言われたのに最近

「光輝～？いつ瞳は黄色になったの～～～？」

とかも言いたい放題言われている安藤光輝です！

とか、誰に言うわけでもない自己紹介を脳内でしていると、

「ただいま～～～」

お、永琳が帰ってきたな。

「おかえり～～～」

「光輝～癒して～尻尾モフモフさして～～～」

「おい、どうした永琳！！！キャラがおかしいぞ！！！」

本当にどうしたんだ永琳。

「だって～疲れたんだもん！！！」

「まずそのキャラを直せ！！！」

ぷくっ、と頬を膨らましてすねている永琳。

「まじめにどうしたんだ永琳。ここんとこ毎日そんな感じなんだが??？」

「ロケット作ってんのよ。ロケット」

「ロケット～～？なにするんだよ」

「・・・・・月に行くのよ」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・は？

「ちょっと待て永琳。どうゆうことだ??？」

「だから月に行くのよ」

「月に行くのは分かった。ナゼ??？」

「理由は2つ。一つ、私達の科学力が高くなりすぎてここにはいられなくなったから」

「ふむふむそれで??？」

「二つ、後一週間たったら妖怪がここに襲ってくるから」

「ふむふ・・・・・・・ってちょっと待て。妖怪が襲ってくるって？？？」

なぜだ・・・・・・・・・・・・・・・。

「そうよ。なぜかは知らないけどね」

「ふーん。ま、頑張ってくだせぇ」

「？何言ってんの。光輝も行くのよ」

「！！！え～～～！ヤダ～～～？」

「なんで『？』がつくのよ！！！」

「でも、なんで俺まで？？？」

「なんでも」

「理由は？？？」

「なんでも」

「・・・・・・拒否権は？？？」

「ないわよもちろん」

・・・・・・月に行きたくね～～～～～～よ～～～～～～～！！！

第六話　月移住計画発動（後書き）

ぜんぜん書けなかった・・・・・・・・・・

第七話　妖怪達の強襲

そんなわけで、一週間後。

の朝。

「2時っくらいかな」

「何が？」

「ん？あぁ。妖怪が攻めてくるの」

「なんで分かるの？」

「あーとな、俺は、とてつもなく敏感な人ならたぶん見つからない程度の薄い妖力を放って辺りを把握しているんだ。今はまだ半径5キロぐらいだけどな。それで今はまだ妖力の数がバラバラだしそんなに近くには無いから大丈夫だ」

「2時って言うのは？」

「ありゃ勘だ」

「あっそう」

「永琳、ロケットの準備は出来てるのか？」

「まあ、だいたいね」

「そうか。ならいいや」

「・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・」

会話がぜんぜん進まねーよ。

どうすんのこの空気。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

そんでもって、1時頃。

「よ、妖怪がきたぞーーー」

と、見張り番の声。

意を決し俺は、

「うっし、行って来る」

「・・・・・・・・・絶対に・・・・・・・・絶対に・・・・戻ってきてよ・・・・？」

目じりに涙を浮かべた永琳が、言った。

「分かった。約束する」

「約束よ、約束だからね」

「するって言ってるだろ？指切りでもするか？」

冗談で言ったつもりなのに、小指出してきたし。

「「ゆーびきーりげーんまーん、嘘ついたら「光輝の頭に弓１０００発いーれる」ゆーびきったっ！」」

うわー超怖ーー。絶対帰ってこよ。

「じゃ、行って来る」

ーSｉｄｅ　どっかの都市を攻める妖怪のボスー

「ふふっ・・・・・・」

思わず笑みを漏らしてしまう。

これで勝てる、勝てるぞ。

これであの邪魔で忌々しい都市を消せる。

強いヤツなんていなかったハズだ。

「ふふっ・・・・・・」

居たとしても、人質を取ればいいだけの話だ。

これで勝てる・・・。

ーSide　永琳ー

行ってしまった・・・。

でも、

「・・・光輝なら、大丈夫よね・・・」

大丈夫、大丈夫だから。

一度でも光輝が嘘をついたことがある？

ない。一度も。

絶対・・・大丈夫だよね・・・。

絶対・・・

「・・・帰ってくるのよね・・・」

苦しい時の神頼み、と分かっているままずっと神に頼み続ける・・・

・・・。

無理と分かっていながら・・・・・・。

ーSide　光輝ー

「ウオォォォォォォオオオオオオオオ」

と、城壁の外から聞こえる。

バチィィィィィイイイイイイイイ

と、自分の体から電気を放出させる。

銃を両手に

「さあ、ショータイムだ」

城壁を突き破って出てきた妖怪の頭を妖力弾で打ち抜いた。

ーSide　どっかの都市を攻める妖怪のボスー

さぁて、今頃突入したところだろう。
後は、朗報を待つだけだ・・・。
「ボ、ボス！大変です！！」
「そんなに焦って。どうかしたのか？」
「だ、第1部隊全滅しました！！」
「な、なにっっっ！！！！」
少なからず、全滅なんてする輩はいないぞ！
「今の状況は」
「第2部隊が残り数名・・・・・・っ！ほっ、報告します！だっ、第2部隊ただ今全滅しました！」
「なんだとっ・・・・・・」
第2部隊までもがだと・・・・・・・。
「敵はっ」
「ひっ、一人です！第1・2部隊たった一人によって全滅させられましたっ！」

ーSide　光輝ー

なんだ・・・もう終わりか・・・。

「おーい、永琳ー。終わっ・・・・！」

なにか・・・来る・・・！

「随分可愛がってくれたじゃないか」

妖怪・・・ざっと１００００体。

「っ・・・！下がれ永琳！」

「な、何、この数・・・！？！？！？」

「ボス。どうやらアイツの大切な物はあの『人』だと思われます」

「そのようだな。あの『人』を捕まえろ！」

「「「「「はっっっ！」」」」」

「永琳っ！！！」

永琳が１００体ぐらいに囲まれてしまった。

「どうぞ、ボス。人質です」

「おい、こいつを殺されたくなけりゃ、お前死ね」

「そんな脅しが効くとでも？」

「そうか・・・。ならこうしてやる」

ズパッッッッッアアアアアアアアアアアアアア

頭の中で、何かが、切れた。

第七話　妖怪達の強襲（後書き）

次でたぶん永琳編終わります。

第八話　守るべき物のために・・・・・・・

「そうか・・・。ならこうしてやる」

そう言ってボスと呼ばれた妖怪は・・・

長く鋭い爪で

永琳を

永琳の首を

はねやがった

ドサッ

と、とても重い物が落ちたような音がした。

永琳の首が目の前に転がってくる。
妖怪の持っている永琳の首からは血が噴水の様に噴出していた。

頭の中で何かがプツンと音をたてて、切れる。

光の速度で永琳の体を奪い返し、頭をくっ付けありったけの霊力を送る。

永琳は不老不死と自分で言っていた。

頼む・・・・・・頼むから・・・生きていてくれ・・・・・・。

人工呼吸をする。心臓を押す。何回も。何十回も。何百回も。

そうすると、ドックン・・・ドックン・・・と心臓が動き始めた。

「良かった・・・・・・本当に・・・良かった・・・・・・」

「何が良かったんだよ。ボス、アイツ変な事ほざいてやがりますぜ」

俺は立ち、気絶している永琳をお姫様抱っこして、ロケットの所まで行く。

「ど、どうしたんですか？」

と、まずいろんな人から聞かれた。

まあ、そこはいいとして、と、うながし近くにいた人へこう頼んだ。

「頼む。永琳が起きたら俺が『約束は守れなかった。すまない』と言っていたと、伝えておいてくれ」

「わ、分かりました」

承諾が得られたので、あの永琳を殺(や)った妖怪の元へ行った。

俺の大切なものを、永琳を、都市を、この妖怪達が、傷つけた、壊した。

その償いのためにまず、この目の前に居る妖怪を

「殺す・・・・・・・・・・・・・・・死んで詫びろ・・・・・・・・・・・・・」

雷のような轟音を出して、体に電気を纏う。

俺は最後にこう問う。

「死んで詫びる覚悟は出来たか？」

答えが返ってくる前に敵の集団の中に突っ込んでいった。

―Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ―

光輝の突っ込んでいった近くの妖怪からバタリ、バタリと倒れていった。

光輝の纏うあまりの高電圧により、感電して倒れたのだ。

妖怪達は後退していくが、完全に怒っている光輝がそれを許すはずが無い。

手を前に掲げる。

すると妖怪達が集まっていく。意思は関係無しに。

そこに自分の纏う電気をかたどり、５メートルはあるであろう、大剣を作り出し、横にふるう。

そんな戦いが１０分ほどたった時、

そこはもう、妖怪の血の海になっており、その中で立っているのは
たった1人となっていた。

彼は考えた。

なぜ守れなかったか。

なぜ壊されたか。

自分が強いと過信していたから？

能力があるから大丈夫だと思っていたから？

そうだ。そのとおりだ。

ならばどうする？

答えは一つ。

強くなる。自分で思っている以上に。

彼はまた旅に出る。

修行の旅に。

自分の大切な、守るものを見つけるまで・・・・・・。

第八話　守るべき物のために・・・・・・（後書き）

永琳編終わりました。
次は何にしよっかなーーー。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7351y/

東方電光伝

2011年12月27日19時54分発行